

シンポジウム抄録

第1主題 寄生虫

座長：森下 薫（阪大名誉教授）

東南アジア地域のフィラリア その疫学上の諸問題

林 滋 生（横浜市大医学部）

東南アジアでヒトの間に流行しているフィラリアは *Wuchereria bancrofti* (Wb と略称) と *Brugia malayi* (Bm と略称) の二種類であるが、近年判明してきた著しい点の一つとして、夫々の種類が、そのマイクロフィラリア (Mf と略称) の定期出現性からいくつかの型に分けられるということが分かってきた。Wb には地域を少し広げて南太平洋まで含めると、夜間定期、夜間亜定期、昼間亜定期の3型があり、Bm には夜間定期と夜間亜定期の2型がある。夫々分布を異にし、主媒介蚊の種類、ヒト以外の Reservoir の有無、疫学的特性等に異った点が見出されてきた。ことに Reservoir の有無は、撲滅の難易とも関連して興味ある問題を示している。次にセイロンやビルマのラングーンに見られる如く、戦争による衛生施設の損壊や難民の流入、都市の急激な膨張等にもなって、urban な性格のある *Culex fatigans* の発生が増え、これによって媒介される Wb が、人口の過度に集中した地域で著しい流行を起すようになってきたことは、早急の対策を要する問題を提起した。またこれらの地域には多くの民族がまじりあっているが、同じ地域に住んでも人種により、また性別で罹感率に甚だしい差異があることは注目を要する。ラングーンの Wb の例では、インド人がビルマ人、中国人の倍の Mf 陽性率を示し、各人種ともに男は女の倍も高い陽性率を示す。衣食住や風俗習慣のちがいがから、蚊に刺される度合にあるいは差でもあるのかまだ不明であるが、ラングーンでの Mf 陽性率の年齢分布から、Catalytic Model をつかって推算すると、感染して Mf 陽性に

なる確率は、インド人がビルマ人より高く、一旦陽性になったものが陰転する確率は、逆にビルマ人の方がインド人よりも高い。また男も女も Mf 陽性になる確率は同じだが、陰転する確率は、女が男より大きいことが分かった。更に最近皮内反応が開発されて、伝播の程度が推測できるようになりつつあることも注目される。これからみると人種、性別によって伝播をうける度合にはあまり差がなく、むしろ体質的なものが感染の成立、維持に関与しているように思われる。

鉤虫症の発症機転

石崎 達（国立予研）

一般に寄生虫の集団検診に際して気付くことは大部分の保虫者が無症状で、その内の1部のものが臨床症状をもっていることである。私は数年間にわたり鉤虫症を対象にしてこの問題の原因を追求してきたのでここにまとめて述べる。

鉤虫の寄生は貧血を主症状として消化器および一般症状の発現をみるが、これは寄生虫数だけで簡単に説明できず、症状の発現は虫数と宿主の両方面の要因の複雑な相互関係の上になりたっていることがわかった。これを具体的に述べると次の如くである。

種別に血色素量 (g/dl) と寄生虫数との関係を多数例で検討すると男性ではズビニ鉤虫30匹以下、アメリカ鉤虫100匹以下では貧血は起らず、それ以上の寄生者で、はじめて貧血 (血色素量の減少) と虫数に相関関係がみられた。女性ではこれよりやや少数の虫数から同じ関係がみられる。

また男の貧血群 (13g/dl 以下) と正常群 (13g/dl 以上) に分けてアメリカ鉤虫寄生虫数と網状赤血球数 (%) の相関をしらべてみると、両群とも虫数に比例して網状赤血球の増加の傾向を示すが、その増加係数